

だいとう

# 今昔物語

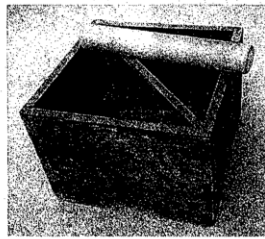
第5話

## 斗掻棒と斗桝

斗掻棒は、米などの穀類を斗桝に盛って計量する際に、余分な盛り上がり掻き均すために用いた櫛や桐で作った円柱形の道具で、この棒の操作次第で穀類の容量に増減がみられました。

江戸時代末期、中嶋健二さん（深野北3丁目・80歳）の曾祖父にあたる伊左衛門さんは、当時深野北新田の地主であった鴻池家が、幕府に年貢米を収納する際、幕府の役人の目の前で、すばやく斗桝に米を立てて入れるなど（米を立てて置いていくのは、米を横に寝かせて置いていくのに比べて、米と米との隙間がより多くあるので、その分、収める米の量が少なくて済む）の桝計りが大変

上手であったので、鴻池家はその技量を見込まれて、毎年1月に鴻池家の支配人と一緒に大坂から舟に乗って江戸蔵前まで幕府に年貢米を収めに行っていたそうです。



斗掻棒（長さ36寸、直径55寸）と斗桝（角形で上縁と斜めに鉄が付いている。1斗約18斗用）

だいとう

# 今昔物語

第6話

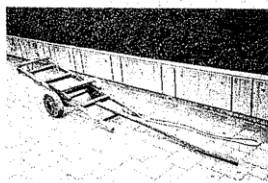
## 野崎の山の「べた車」

西田秋三さん（野崎3丁目・80歳）から聞いた話です。

燃料革命により各家庭にプロパンガスが普及しだす昭和40年ごろまで、野崎の山持ちの農家では、11月末から3月末の冬の間、自家用の炊事とふろたき用燃料の薪としてくぬぎや松を運び出すのに、べた車（山車）が使用されてきました。この小さなべた車は1回で60貫（二百二十五）もの薪を運ぶことができました。

山に入る時には、べた車を車台と車輪に分解し1人ずつ、山に着くと組立しました。生駒山地の中でも野崎の山は傾斜が急で、自分の山までべた車をついで登ると冬でも汗びっしょりになりました。反対に下

りは急で危ないので、べた車の前の梶棒を上げ、ブレーキをかけながらソロソロりと下って行きます。小学生の子どもを重りとして、べた車の後方に乗せ、ブレーキがわりにして山を下りてきたこともありました。やがて都市ガスが普及し、燃料として薪を使用しなくなり、べた車も野崎の山から消えていきました。



車台（桧）長さ179寸、幅47寸  
梶棒 長さ174寸（肩ひも付き）  
車輪（松）直径29寸、厚さ8寸